

# 中高年者の意志決定スタイルが購買行動に与える 影響に関する検討

— 若年者との比較から —

Influence of decision-making style of middle-aged and older adults on  
shopping behaviors

— Comparison to young adults —

田中 真理\*・鎌田 晶子\*\*・秋山美栄子\*\*\*

Mari TANAKA, Akiko KAMADA, Mieko AKIYAMA

**要旨：**本論文では、中高年者の意志決定スタイルが日常場面における食料品の買い物行動スタイルおよび買い物における心理状態について影響を及ぼすか検討するため、中高年者および若年者（大学生）の2つの年齢群を対象に質問紙調査を行った。その結果、中高年者も若年者も共通して、即断が困難な優柔不断スタイルは、買い物での失敗や後悔、混乱につながる事が明らかになった。また楽しみとして買い物をするには、中高年者では品質、若年者では価格にこだわらずに、買い物での責任を軽減することが重要であることが示された。買い物で充実感を得るには、自分の決定に自信を持っていることが重要であり、さらに中高年者では迷わないこと、若年者では責任を回避しないことが重要であった。また、両群において依存的決定スタイルの性質が異なり、中高年者では他者依存性として機能する反面、若年者では商品吟味時の情報源としての他者依存として機能することが明らかとなった。最後に、本研究の限界と今後の課題について議論が行われた。

**キーワード：**意志決定スタイル、購買行動、中高年者、若年者

---

\* たなか まり 文教大学生生活科学研究所客員研究員

\*\* かまだ あきこ 文教大学人間科学部

\*\*\* あきやま みえこ 文教大学人間科学部

## 1. 序

意志決定スタイルには、いくつかのタイプがあるとされる。たとえば、意志決定時に考えられる選択肢を十分に検討する「熟慮」タイプや「責任転嫁」タイプ、なかなか決定ができない「優柔不断」タイプ、あまり深く考えない「短慮」タイプなどがある（Radford・Mann・太田・中根, 1989; Mann, 1982）。田中・鎌田・秋山（2012）は、中高年者の意志決定スタイルとして、即断が困難で、考えがすぐにまとまらない「優柔不断」、決定責任を他者にゆだねる「責任回避」、意志決定時に他者からのサポートやアドバイスを求める「依存的決定」、あまり深く考えずに決定する「短慮」、自己決定に自信があり自己信頼に基づいた判断を下すタイプとして「自己信頼的決定」という5つのタイプを挙げている。さらに、若年者と比較して中高年者の方がより適応的な意志決定スタイルをとるようになるという意志決定スタイルの成熟の可能性が示唆されている（秋山・田中・鎌田, 2012）。これは、最適な決定に至るにあたり、年齢が高い対象者の方が洞察と知恵を会得しているという先行研究における指摘（Worthy, Gorlick, Pacheco, Schnyer, & Maddox, 2011）や、知恵研究における意志決定能力に関する言及（Sternburg, 1985）を裏付ける結果であると考えられる。一方、田中他（2012）は、意志決定場面によって適応的な意志決定スタイルが異なる可能性も示唆しており、特定の意志決定場面における意志決定スタイルの在り方について検討していく必要があると言及している。

そこで、本研究では、中高年者の意志決定場面として、特に食料品の購買行動に焦点を当てる。買い物行動には、商品の表示や店舗の配置を理解する能力、金銭管理能力、身体能力に加え、商品を決める意志決定能力など様々な身体的、認知的能力が関わっていると考えられている（鎌田・田中・秋山, 2012）。特に、活動的かつ自立した高齢者はアクティブ・シニアとして有望な消費者として消費市場でも注目されてきており、現代の日本においては消費活動に積極的な高齢者の占める割合が今後大きくなっていくことが推察されている（鎌田他, 2012）ことから、アクティブ・シニア層の消費行動に焦点を当てることは社会的にも意義があると思われる。

そこで本論文では、田中他（2012）の意志決定スタイルが、買い物スタイルならびに買い物に関する行動や心理についてどのように影響をもたらすかを検討することを目的とする。なお、中高年者の買い物スタイルがもたらす影響の特徴を発達の視点からも明らかにするため、若年者との比較検討も行う。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

本調査では、中高年群と大学生群の2つの年代群を対象に調査を実施した。中高年群では、関東圏内在住で、老人大学・大学院の受講生、福祉センター利用者および社会参加活動（サークル）に従事している中高年者に調査を依頼した。大学生の調査対象者では、埼玉県内の大学生を対象に調査を依頼した。調査用紙の回収数は、中高年者が381部、大学生が300部であった。

中高年者では、50歳代以上でかつ回答に不備のない259名を、また大学生では、10 - 20歳代でかつ回答に不備のない276名を分析対象者とした。分析対象者の内訳を表1に示した。

表 1 分析対象者の内訳

	中高年 (N = 259)	学生 (N = 276)
平均年齢	67.51 ± 5.63 歳 レンジ：51-84	19.6 ± 1.08 レンジ：18-25
男性	102 (39.38%)	75 (27.17%)
女性	157 (60.62%)	201 (72.83%)
同居 有	34 (13.13%)	112 (40.58%)
無	225 (86.87%)	164 (59.42%)
買物の頻度 (週)	3.22 日	2.29 日

## (2) 手続き

調査は個別無記名式の質問紙にて実施された。中高年者は、老人大学、福祉センター及びサークルなど社会参加活動の開催場所にて調査用紙を配布した。配布した対象者のうち、協力の得られた対象者に各自持ち帰って記入してもらい、後日回収を行った。また、期間内に質問紙を回収することが不可能な対象者には、その場で回答してもらった。大学生は、授業中に調査用紙を配布し、回答後提出してもらった。実施期間は、2011年10月—12月までであった。

倫理的配慮として、表紙に研究の大まかな趣旨を説明し、研究協力は任意であること、協力しないことによって何らかの不利益は被らないこと、プライバシーの保護、データは統計的に処理され個人の特長や公表はしないことを明記し、質問紙の提出をもってこれらに同意したこととした。さらに中高年者用の質問紙では、文字サイズを大きくし、日常生活でなじみがないと判断される漢字にはふりがなをふり、回答しやすいように配慮した。

## (3) 調査項目

フェイスシートでは性別、年齢、同居家族の有無と内訳を尋ねた。また日頃の食料品の買物についての項目を設けた。また一週間の買物の頻度、買物に行く店舗の種類、買物への交通手段、さらに主観的年齢についても尋ねたが、本稿ではこれらの項目は取り上げないこととする。

意志決定スタイルを測定する尺度として、意志決定の対処スタイル尺度 (Radford 他, 1989) を参考に作成された意志決定スタイル尺度 (田中他, 2012) を用いた。本尺度は「優柔不断」、「責任回避」、「依存的決定」、「短慮」、「自己信賴的決定」の5因子から構成される。

買物に関する尺度として、Sproles & Kendall (1986) の「買物スタイル尺度 (Consumer style inventory: CSI)」8因子を元に鎌田他 (2012) が作成した尺度を用いた。本尺度は日常の食料品に対する買物の志向性を尋ねる項目として「新奇志向」、「安価志向」、「不注意・衝動性」、「品質志向」、「ブランド志向」、「買物の楽しみ (逆転)」、「習慣の重視」、「買物での混乱」の8因子から構成されている。また、高齢者の買物行動やそれに伴う心理状態を測定する尺度として、高齢者の買物行動・心理尺度 (鎌田他, 2012) を用いた。本尺度は、「買物充実感」、「認知的負担感」、「商品の吟味」、「決定の他者依存」の4因子から構成されている。

なお、解析には SPSS 19.0 を用いた。

### 3. 結果と考察

#### (1) 意志決定スタイルが買い物スタイルに及ぼす影響の検討

まず、中高年者の意志決定スタイルが、日常生活の行動の一つである食料品の買い物スタイルに及ぼす影響を検討するために、意志決定スタイルの各下位尺度得点を独立変数、買い物スタイルの各下位尺度得点を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（表2）。その際、中高年者と若年者を比較検討するために、群別に分析を行った。なお、中高年群、若年群ともにVIFが2.0未満であったため、多重共線性の疑いは低いと判断された。

表2 中高年群と若年群ごとの意志決定スタイルを独立変数、  
買物スタイルを従属変数とした重回帰分析結果

		新奇志向		安価志向		不注意・衝動性		品質志向		ブランド志向		買い物の楽しみ(逆転)		習慣の重視		買い物での混乱		
		$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	
優柔不断	中高年	—	.01	—	.04	.18**	.30**	—	-.12	—	.08	—	-.17**	—	.14*	.32**	.42**	
	若年	—	.00	—	.06	.21**	.26**	—	-.10	—	.00	—	.03	—	.11	.25**	.31**	
責任回避	中高年	—	-.07	—	-.03	—	.23**	-.27**	-.21**	—	.03	—	-.27**	-.21**	—	-.03	—	.30**
	若年	—	.05	-.23**	-.14*	—	.26**	—	-.08	—	.13*	-.34**	-.25**	—	.10	.13*	.25**	
依存的決定	中高年	—	.08	—	.10	—	.23**	.16*	.06	—	.02	.14*	.04	—	.131*	.15*	.32**	
	若年	—	.10	.29**	.22**	—	.18**	—	-.04	—	.06	.27**	.16**	—	.04	—	.14*	
短慮	中高年	—	.10	—	.05	.22**	.29**	—	-.03	—	.18**	—	-.14*	.22**	.22**	.12*	.23**	
	若年	—	.06	—	-.15*	.24**	.23**	—	-.05	—	.15*	—	-.03	—	.11	—	.10	
自己信頼的決定	中高年	—	-.10	—	.04	-.24**	-.31**	—	.11	—	-.06	—	.07	—	.05	—	-.22**	
	若年	—	.03	—	.12*	-.18**	-.22**	—	.09	—	.06	—	.17**	—	.01	—	-.10	
R <sup>2</sup>	中高年	—	—	—	—	.19**	.07**	—	—	—	.06*	—	.06**	—	—	.21**	—	
	若年	—	—	.10**	—	.15**	—	—	—	—	.13**	—	—	—	—	.11**	—	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

中高年群 (N = 259)、若年群 (N = 276) ごとの標準偏回帰係数および相関係数を示す

分析の結果、両群において「優柔不断」は「不注意・衝動性」と「買い物での混乱」に正の影響を示した。意志決定における優柔不断さが、うっかり買いや衝動買い、何を買えばよいのかわからないといった買い物時の混乱を高めることが示され、意志決定においてなかなか決められない傾向が、実際の日常生活における買い物においても失敗や混乱につながることを示されたといえる。「責任回避」は、両群共通して「買い物の楽しみ(逆転)」に負の影響を示したが、中高年群のみ「品質志向」に負の影響を、また若年群のみ「安価志向」に負の、「買い物での混乱」に正の影響を示した。決定時に自己決定を避けようとする傾向(責任回避)は、中高年者では品質へのこだわりを低め、買い物での楽しみを高めることにつながり、若年者にとっては値段を気にしない結果、商品選択についてあれこれと迷うことにつながると考えられる。責任回避的意志決定スタイルは、田中他(2012)では不適応的な意志決定スタイルであると考察されていたが、買い物行動における商品選択を慎重に行うのではなく、より楽しんで買物をするという買い物の娯楽性を高めるという点においては適応的であると考えられる。すなわち、人生に関わる選択における決定場面と日常生活での決定場面では、意志決定スタイルの適・不適が変わってくる可能性があると考えられる。

「依存的決定」は両群ともに「買い物の楽しみ(逆転)」に負の影響を示し、さらに中高年群においては「品質志向」と「買い物での混乱」に正の影響、若年群では「安価志向」に正の影響を示した。依存的決定スタイルは、意志決定においてより他者からのサポートやアドバイスを求め

る傾向であるが、こうした決定スタイルは中高年者の買い物行動においてより良質の商品を記入することにより、どの商品を選択すべきなのかという買い物でのある種の混乱を高めてしまう可能性が考えられる。その結果、楽しみのための買い物という、買物の娯楽性を低減させてしまったと考えられる。逆に、若年者にとっては、品質ではなく安価志向となり、より安い商品を追求める買い物への姿勢がうかがえる。また、安価志向では、品質に比べて、商品選択の基準が価格という可視化されやすいものであるため、若年者では買物の混乱が生じないのではないか。

一方、「短慮」は両群において「不注意・衝動性」に、また中高年群においてのみ「習慣の重視」と「買い物での混乱」に正の影響が見られた。あまり深く考えない短慮的スタイルは、買い物に関してもうっかり買いや衝動買いが高まることが示され、短慮傾向が日常生活における行動に対しても影響をもたらすことが示された。また、短慮は中高年者においてのみ習慣の重視と買い物での混乱を高めていた。若年者よりも高齢者の方が、買い物における認知的負担感が高い（鎌田他, 2012）ため、買い物での混乱が高まるだけでなく、そうした認知的負担を低減するためにこれまでの習慣をより重視するようになると考えられる。

「自己信頼的決定」については、両群において、「不注意・衝動性」に負の寄与を示し、うっかり買いや衝動買いといった買物の失敗を低減していた。これは自己決定に対する自信が高いと、買物をしてそれを失敗したり、後悔すること自体が少ないため、結果として買い物での失敗が低減されると解釈できる。

## (2) 意志決定スタイルが買い物行動および心理状態に及ぼす影響の検討

次に、中高年者の意志決定スタイルが、食料品における買い物行動および心理状態に及ぼす影響を検討するため、意志決定スタイルの各下位尺度得点を独立変数、買い物行動・心理尺度の下位尺度得点を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（表3）。その際、中高年者と若年者を比較検討するために、群別に分析を行った。なお、中高年群、若年群ともにVIFが2.0未満であったため、多重共線性の疑いは低いと判断された。

表3 中高年群と若年群ごとの意志決定スタイルを説明変数、  
買い物行動・心理を目的変数とした重回帰分析結果

		買い物充実感		認知的負担感		商品の吟味		決定の他者依存	
		$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$
優柔不断	中高年	-.29**	-.33**	.24**	.24**	—	-.19**	.16**	.28**
	若年	—	-.21**	.20**	.24**	—	.05	—	.06
責任回避	中高年	—	-.30**	—	.16*	-.23**	-.29**	—	.24**
	若年	-.17*	-.24**	.24**	.28**	—	-.05	.15*	.15*
依存的決定	中高年	—	-.25**	—	.21**	—	-.06	.24**	.31**
	若年	—	-.03	-.18**	-.02	.13	.16*	—	.06
短慮	中高年	—	-.14*	—	.15*	-.17*	-.25**	—	.18**
	若年	—	-.05	—	.16**	-.22**	-.23**	—	.06
自己信頼的決定	中高年	.18**	.25**	—	-.16**	—	.15*	—	-.12*
	若年	.18**	.25**	—	-.20**	—	.06	—	-.12*
$R^2$	中高年	.14**		.06**		.11**		.12**	
	若年	.09**		.12**		.07**		.02*	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

中高年群 ( $N = 259$ )、若年群 ( $N = 276$ ) ごとの標準偏回帰係数および相関係数を示す

分析の結果、「優柔不断」は、両群ともに「認知的負担感」に正の影響を示し、さらに中高年群のみ「買い物充実感」に負、「決定の他者依存」に正の影響を示した。即断が困難で思考が拡散しやすい決定スタイルは、買い物行動においても、認知的負荷を感じやすいだけでなく、中高年者にとっては、買い物に対する満足感や効力感を低減させ、また商品選択においても他者の意見を求めるようになると考えられる。

「責任回避」に関しては、中高年群では「商品の吟味」に負の影響を示し、一方若年群では「買い物充実感」に負、「認知的負担感」と「決定の他者依存」に正の影響を示した。中高年者にとっては、自己決定を回避し他人任せにする決定スタイルが、商品の吟味を低減し、一方、若年者にとっては、そうした決定スタイルによって買い物での失敗や商品選択を他人任せにしてしまうことにつながる事が明らかとなった。特に、「責任回避」と「商品の吟味」は相関係数においても群間に有意な差が見られており ( $\chi^2(1) = 8.02, p < .01$ )、これらの結果は、買い物において中高年者は商品の品質を吟味するという食料品選択において責任を持っている反面、若年者には中高年者ほど責任を持っていないという世代間の差によって解釈できる。逆に、若年者は食料品の買い物に対して中高年ほど責任がないため、買い忘れ（認知的負担感）が高まり、また商品選択に対して責任を持たないために他者に決定を委ねてしまうと考えられる。

「依存的決定」は、中高年群では「決定の他者依存」に正の影響を与えるが、若年群では「認知的負担感」に負、「商品の吟味」に正の影響を示した。これは、依存的決定スタイルが、中高年者にとっては商品選択においても他者の決定にゆだねる他者依存性としての性質を持つが、若年者にとっては、他者からの情報を活用しながら商品吟味を行うという情報源の活用としての性質をもつため、結果として買い物における認知的負担が軽減すると考えられる。これは、「依存的決定」と「短慮」との関連が、中高年群と若年群で逆転しており、中高年者における「依存的決定」があまり深く考えず他人からのアドバイスを求めるといった他者依存性を意味するのに対し、若年者では、短慮と負の関連が見られより吟味するという意味をあらわすという先行研究の結果（田中他, 2012）を支持するものであると考えられる。

「短慮」は両群ともに「商品の吟味」に負の影響を示し、あまり深く考えないという決定スタイルは、商品選択においても同様の影響をもたらすことが明らかとなった。最後の「自己信頼的決定」では両群ともに、「買い物充実感」に正の影響を示し、買い物に対して充実感が満足感、効力感を高めるには、自己決定に自信を持つことが重要であることが示された。

#### 4. 総合的考察

本研究では、意志決定スタイルが、買い物スタイル、並びに買い物行動および心理状態に及ぼす影響を検討することが目的であった。買い物スタイルは、買い物に対する志向性を測定する尺度であるが、本研究では特に食料品に関する買い物に焦点を当てて検討を行った。

その結果、中高年者も若年者も共通して、即断が困難な優柔不断スタイルは、買い物での失敗や後悔、混乱につながる事が明らかになった。また、楽しみとして買い物をするには、中高年者では品質、若年者では価格にこだわらずに、買い物での責任を軽減することが重要であることが示された。さらに中高年者では、他者に相談することで、商品に関する情報量が増えることが、結果的に買い物での混乱を招く可能性があり、その反面あまり深く考えない短慮スタイルで

はなじみの商品を買う習慣を重視することで買い物での認知的負担を低減しているという適応的な一面もうかがえた。買い物で充実感を得るには、自分の決定に自信を持っていることが重要であり、さらに中高年者では迷わないこと、若年者では責任を回避しないことが重要であった。また、両群において依存的決定スタイルの性質が異なり、中高年者では他者依存性として機能する反面、若年者では商品吟味時の情報源としての他者依存として機能することが明らかとなった。

以上のことより、意志決定スタイルは、日常生活における購買行動にも影響を与えることが明らかとなったが、意志決定スタイルの種類によっては年齢差が見られ、その発達の様相や他の意志決定場面における特性についても詳細に検討する必要があると考えられる。

#### 引用文献

- 秋山美栄子・田中真理・鎌田晶子（2012）中高年者の意志決定および購買行動に関する研究（1）～意志決定における性別と年代に関する検討～ 日本心理学会第75回大会抄録集 267
- 鎌田晶子・田中真理・秋山美栄子（2012）高齢者の買い物行動・態度に関する検討（1）若年者との比較 生活科学研究 34 pp.15-26
- Mann, L. (1982) Decision Making Questionnaires I & II . unpublished questionnaires. The Flinders University of South Australia.
- ラドフォード, M. H. B. ・中根允文 (1991) 意志決定行為 — 比較文化的考察 — ヒューマンティワイ
- Radford, M. H. B. ・Mann, L. ・太田保之 ・中根允文 (1989) 「個人の意志決定行為と人格特性（第1報） — ある大学の学生を対象として — 実験社会心理学研究 28 pp.115-122
- Sternberg, R. J. (1985) Implicit theories of intelligence, creativity, and wisdom. *Journal of Personality and Social Psychology* 49 pp.607-627
- Sproles, G. B., & Kendall, E. L. (1986) A methodology for profiling consumers' decision-making styles. *Journal of Consumer Affairs* 20 pp.267-279
- 田中真理・鎌田晶子・秋山美栄子（2012）中高年者の意志決定スタイルの特徴に関する検討 — 若年者との比較から — 生活科学研究 34 pp.3-14
- Worthy, D. A., Gorlick, M. A., Pacheco, J. L., Schnyer, D. M. & Maddox, W. T. (2011) With Age Comes Wisdom: Decision Making in Younger and Older Adults. *Psychological Science* 22 pp.1375-80.

#### 付記

本論文の一部は、日本心理学会第76回大会にて発表された。